

自ら学び続ける子どもをめざして

—第2学年「めざせ！！名たんてい」の実践から—

佐 和 真由美

1 はじめに

生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う」ことである。では、生活科でめざす自立した子どもとは、どのような子どもだろうか。それは、自ら学び続ける子どもだと考える。つまり「あれ？どうしてだろう？」と身近な不思議や問題に気づき、自分なりに追究し、自分の活動をふりかえり、よりよく問題を解決したり、活動を発展させたりしていくことができる子どもである。

子どもたちは、本来それぞれ生き生きと活動し、何からでも楽しい発見をする力を持っている。どのように活動し学んでいったらよいのかを、子どもたち自身が発見し、それを意識できるようにすれば、活動が滞った時でも、それをヒントとして自ら活動を生み出し、学び続けることができるであろう。

そこで、本稿では、そんな子どもをめざして、単元を組み立て、支援のあり方を探っていきたい。

2 活動の実際

(1) 単元について

「家の近くで不思議な形のあじさいを見つけたよ。」と、誰かがそのすばらしさや発見の嬉しさをみんなに伝えたときから、それぞれが今まで気づかなかった道ばたのあじさいに注目するようになる。そして、「どうして色が違うのだろう。」と、各自が見つけたあじさいと比べて考え、友だちの発見が自分の課題につながることもある。

このように、本単元では「?!」みつけを通して、普段何気なく見過ごしている自分の身の回りのものや人と積極的にかかわり、自分なりの気づきをもつ楽しさを味わうことができる。そして、各自の発見を伝え合うことで、お互いの発見や表現方法を認め合い、発見する楽しさを味わうこともできる。また、今まで自分が気づかなかったことに気づいたり、自分の発見や発見した自分のよさに気づいたりすることもできるであろう。

(2) 支援のあり方

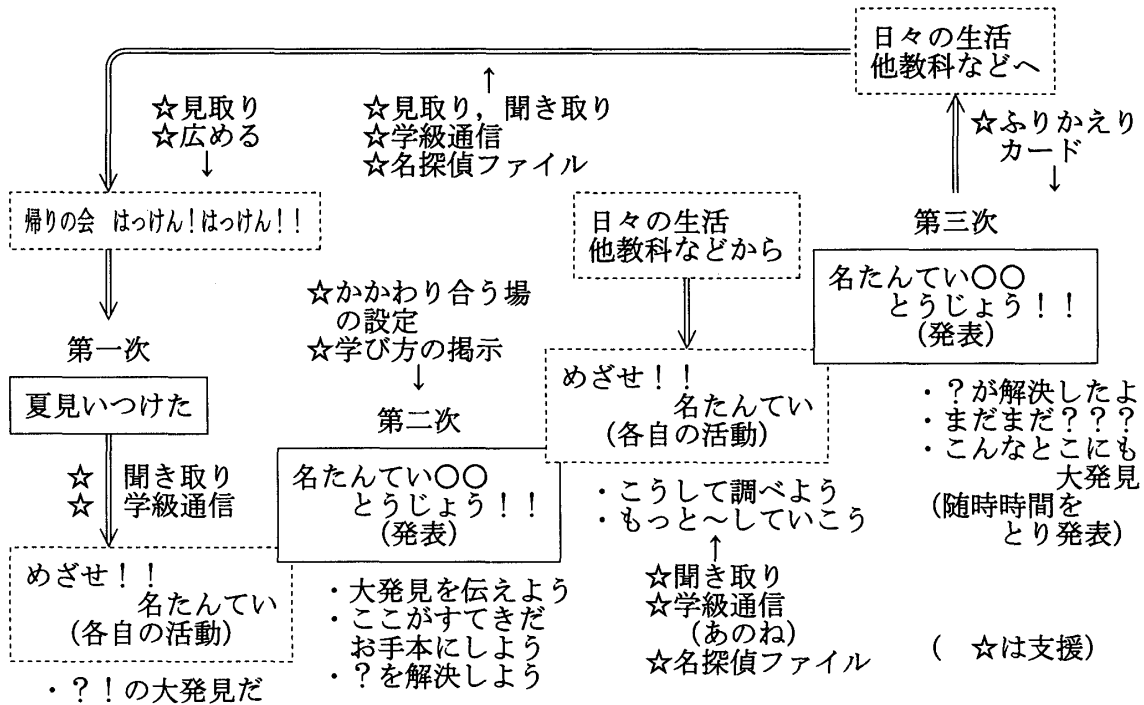
本単元で、変化を感じとりやすい身の回りの自然物だけでなく、日常の何気ない生活の中からも何かを発見し、それを楽しむ姿、発見から生じた自分が不思議だと思ったことや驚いたことを、自分から解決していこうという姿が見られるようになれば、先に述べた生活科でめざす姿に近づくと考える。そこで、

- ①自ら学び続けられるような学習環境づくり
- ②子ども同士がかかわり合い、認め合ったり励まし合ったりできる場の設定
- ③教師のみとりと肯定的な働きかけ、自己評価 の3点を支援とした実践を試みる。

(3) 活動のねらい

- 1 身の回りの人やものに、自分なりにかかわろうとすることができる。
- 2 発見したことを自分なりに工夫して伝えることができる。
- 3 学び方を自分なりに取り入れることができる。
- 4 身の回りの?や!に気づくことができる。

(4) 活動内容と計画



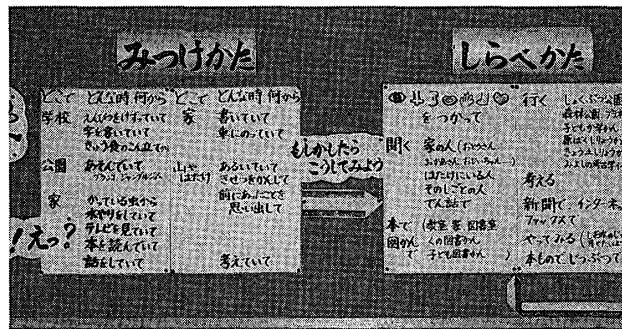
(5) 活動の概要と支援

① 自ら学び続けられるような学習環境づくりについて

ここでの支援は、日々の学級活動で行っている「帰りの会」の発見タイムと、本単元の「名探偵登場」での発見発表を関連づけ、子どもがいつの間にか学び方を意識していけるようにしたことである。

帰りの会での「発見!! 発見」タイムは、日常生活の中でどのようなことを見つけたらよいのかを知り、発見の楽しさを共有する時間である。自分の発見を発表し、それを子どもたちがまとめて掲示を続けていく。この発見タイムは、教師にとっても、その子の興味・関心が、今、どこにあるのか、何か自分がわくわくするものを、自分なりに見つけることができているのかを見とる、貴重な時間になっている。

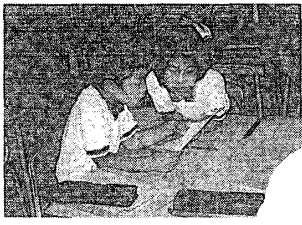
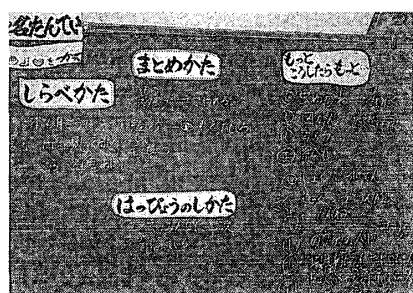
これに加えて、「名探偵登場」での各自の発表や活動の中から、みんながお手本にしたい「見つけ方」「調べ方」「まとめ方」「発表の仕方」を子どもの言葉でまとめて掲示をしていくことにした。ここでは、どのように学んでいったらよいのか、ということに子どもたち自身が気づくように、子どもたちの活動の中から子どもたちの言葉でまとめることを心がけた。こうして、随時発表の時間をとり、少しずつ掲示を続けるうちに、休憩時間に発見コーナーの掲示をめくったり、次にどうしようか迷ったときに調べ方などの掲示を見たりする子どもの姿が見えてきた。また、自慢の発見をしっかりと聞いてもらいたいと願い、友だちの発表を聞くことは自分の活動のヒントになると気づいた子どもたちは、「聞き方」についても考え、掲示に加えることになった。



以上の学習環境づくりは、生活科授業を支える土台づくりである。その意味で、お互い

の思いを聞き合い、話し合い、よさを認め合える学級づくりは、最も大切な土台だと考えている。

② 子ども同士がかかわり合い、認め合ったり励まし合ったりできる場の設定について本単元で設定した場合は、各自の発見を伝え合う「名探偵登場」である。ここでの支援として、子ども達ができるだけ多くの発見に触れることができるように、教師も共に発見を楽しみ、子ども同士がかかわり合えるように声をかけ、励ますことを心がけた。以下は、各自の発見を伝え合う「名探偵登場」の活動場面である。

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ
<p>1 見てよ、聞いてよ、大発見!! (お互いの発見を伝え合う場) C: (血液型を知って) よかったところは、声が大きかったところです。こういう血液型について調べた人は他にいないと思うから、よかったです。</p> <div data-bbox="295 716 558 907" style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; display: inline-block;"> <p>スーパーと家のピーマンの色をかいているのがいいと思います。</p> </div>  <p>2 いいとこ 見つけた (友達の発見のよさや気づきなどを話し合う場) T1: お野菜比べの名探偵B君の登場です。 C1: (ピーマン比べの発表をする。) T2: なすびを比べていたDさんは、味はどうだった。 C2: 農家のは甘くありません。たくさん育つよう薬をまいているから。家のは、普通薬をやりすぎない。 C3: 農家は、カバーをしています。太陽が当たらなくて、家のはそのまま。太陽が当たってないからあまりおいしくないのかな。 C4: スーパーのピーマンと自分で育てたピーマンの味とか色とか、いろいろ比べていたのでよかったです。 T3: B君、いろいろ言ってくれたけど、どうかな。 C1: 本当のことがはっきりと分かりません。 T4: どうしたら本当のことが分かるか考えてみて。 C5: 植物の事典を見るといいです。 C6: 植物公園へ電話してみるといいと思います。 C7: 農家の人のピーマンの育て方と比べたらいいと思います。</p> <p>3 めざせ!! 名探偵 (次の活動へのめあてをもつ場)</p>	<p>1 教師も励ましたり質問をしたりしながら、子どもが自分の発見をみんなに伝える楽しさや自分の発見のよさを味わえるようにしていく。 ・ 発見を伝えることが一方通行にならないように、自分の気づきや感想を伝えるように促す。</p> <p>2 ひとりの発見にできるだけ多くの子どもがかかわるように、言葉かけをしていく。(T2・T4) ・ 板書で子どもの発見や発見の仕方を位置づけ、どのように活動していくのかを子どもたちが意識できるようにしていく。</p>  <p>・ 友達の?解決の方法を話し合うことで、自分のこれまでの活動で得たことをふりかえり、以後の各自の活動へとつながるようにしていく。(T4)</p> <p>3 次の活動への意欲を高めるために、ひとつでも自分なりの解決方法を考えられるように励まし、その考えを認めていく。</p>

友だちから認められることは、満足感を高め、自分の活動への自信につながる。また、友だちのよいところを見つけることができた子どもにも、発見の喜びが生まれる。「家で作ったピーマンとスーパーのピーマンでは、色が違う。」という?を発見したA君は、友だちの質問にしっかりと答え、調べ方についてたくさんのアドバイスを受けて、とてもにこやかだった。そしてA君は、「本当のことがはっきりしていない。」と、自分なりの課題をつかんでいた。どの子にとっても、ここでのかかわり合いが、次からの活動への意欲となり、各自が友達のよいところを自分の活動に積極的に取り入れるようになってきた。

また、板書で子どもの発言を位置づけ、自分の考えや思いに、自分が気づけるようにし

ていった。そして、ここで感じたことや考えたことを学級通信に載せていくことで、授業時間内には分からなかった友だちの思いを知ったり、自分の活動のめあてにしたりできるようにしていった。

③ 教師のみとりと肯定的な働きかけ、子どもの自己評価について

子どもたちが自ら学び続けるためには、どのように活動し学んでいったらよいかを、子ども自身が発見し、意識できるようにと考えてきた。教師は、今子どもたちがどのような意欲をもってどんな活動に取り組み、どのように進もうとしているのかを見とり、子どもに応じて支援をしていくことが大切である。子どもたちの活動を見とるために、また、子どもたちが今の自分の活動を知り、見通しをもつために、次の手立てを考えた。

- ・名探偵ファイル ・聞き取り ・あのね（日記）
- ・ふりかえりカード ・写真の活用（表情の見とり）

この中の名探偵ファイルは、自分のめあてを決め、たくさんの不思議や驚きを記録していき、自分が追究しようと思ったことを調べてまとめていくものである。このファイルが、自分の活動を見通したりふりかえったりする資料となっている。そして、発見の仕方や調べ方などの学び方も、みんなで話し合いながら、自分の言葉で、自分の活動に合わせてまとめていった。こうすることで、各自で行われている活動や学習の仕方がヒントとなり絡み合い、自分のものになると考えたからである。

子どもたちは、自分のめざす名探偵に向けて、多くの？や！を発見し、友達の発見の仕方や追究方法を自分なりに取り入れて、活動を続けていった。

<名探偵ファイル（左）、学級通信（右）より>

名探偵いへのみち —??!?メモ—

日	どこで	何を	どのようにして	結果
7/1	園	ピーマンの色	ピーマンの葉を	◎
7/5	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
7/12	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
8/1	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
8/8	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
8/15	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
8/22	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
8/29	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
9/5	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
9/12	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
9/19	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
9/26	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
10/3	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
10/10	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
10/17	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
10/24	園	ピーマンの色	葉の色が	◎
10/31	園	ピーマンの色	葉の色が	◎

ふしぎだな？ ひらくしたよ！

ピーマンの色が... スーパーのピーマン

名探偵いへのみち

てん話で何を聞か考えたよ。

9 2 2 3 6 0 0

てん話で

図かんで

右図のA君は、6月のピーマンの？発見から今まで、自分の？を追い続けている。聞き取りでA君の発見を把握し、励まし、「名探偵登場」や学級通信を通して、みんなにA君の活動やがんばりを広めるようにしていった。また、追究段階で時間をとり、友達といっしょに活動する場面を設定した。その結果、A君は植物公園に電話をかけてピーマンの？を解決した。？が解決したA君は、その後も色に注目し、実際に植物公園に調べに行った。そして、「なぜ葉っぱは緑なのに、木は茶色なのか。」という新しい？を持ち帰った。

3 ふりかえって

本実践を3つの支援からふりかえりたい。

① 自ら学び続けられるような学習環境づくりについて

「分からないから〇〇に聞いてみよう。」「今度はここに行ってみよう。」など、今、自分は何をしようとしているのか、これからどうしていけばいいのかという活動への見通しがもてるようになってきた。これは、自分たちが活動する中で見つけた「調べ方」などの学び方を、自分たちの言葉でまとめ、自分のものとしてきたからだと考えられる。

② 子ども同士がかかわり合い、認め合ったり励まし合ったりできる場の設定について
「名探偵登場」後のあのねには、「ぼくは、今からお友だちに聞かれても、ずっと答えられるように調べようと思いました。」「ふしぎだなと思いました。すごいなと思いました。わたしは、あんな名探偵になりたいなと思いました。私も負けなくらいの名探偵になるぞ。」と、友達の活動に刺激を受け、次の活動に意欲を燃やす記述が多く見られた。

この後、友だちが電話やインターネットで調べたことを知り、自分の活動にあった場所に電話をして調べるなど、友だちの発見の仕方や調べ方を、自分の活動に採り入れるようになった。また、自分のこれまでの経験と友だちの発表を結びつけて、自分なりに考えられるようになってきた。

③ 教師のみとりと肯定的な働きかけ、子どもの自己評価について

ふりかえりカードより

発見は・・・とても楽しい (31名)、楽しい (7名)
 ・いろいろ発見できて、分からなかったことがいろいろなことが分かるから。
 ・自分で初めて発見したことが、とてもうれしいから。
 ・自分の発見を人に教えてあげられるし、友達の発見も分かるから。など
 名探偵に近づいたかな
 ・・・・〇名探偵だ (8名)、△近づいているぞ (18名)、×まだまだだ (12名)
 ○家の中、家の外、いろいろみつめてそれで分かることがたくさんあるから。
 △×発見をいっぱいしたが、まだ分からないことがいっぱいあるから。など

ふりかえりからは、発見することを全員が楽しんでいて、また、まだまだ分からないことが数多くあることに気づいたことが分かる。今の自分は名探偵とは言えないと答えた子どもたちは、これから「もっともっと続けて調べて、分からないことが分かるようになる。」「もうちょっといっぱい発見をしてみんなに教えてあげよう。」などと、活動に意欲をもち、当初の自分の課題が解決しても、その過程で出てきた不思議を新たな課題として追いつけたり、不思議や驚きの世界を楽しんだりすることができるようになってきた。

これは、支援を通して、その時々の子の活動を認め、その活動やその子のよさをみんなに広め、お互いがかかわり合えるようにしてきたことと、子ども自身が自分の活動をふりかえり、自分のよさにも気づくことができたことが、活動への意欲を高めたのだと考えられる。これからも、子どもの活動の様子をいつ・どのように伝え合えば、お互いがよりよくかかわり合え、各自のよりよい活動につながるのかを探ること。子どもがどのような思いをもち、どのように課題を追究していこうとしているのかを的確にみとり、その子に応じたアドバイスや言葉かけをしていくことを課題として、子どもたちが自分のすばらしい力に気づき、自ら活動し学び続けることができるように、実践を積み重ねていきたい。

